

期待の膨らむ がん治療2023

あきらめないがん治療

腹腔内化学療法 レーザー光治療

村上正志

医療法人社団貴正会 村上内科医院 理事長
医学博士・京都府立医科大学 元客員講師

**超高濃度ビタミンC点滴
をしている先生方の協力で
成果をあげている腹腔
内がん治療**

末期がんの患者さんで全身化学療法を望まない方もいらっしゃると思います。そのような患者さんに超高濃度ビタミンC点滴療法をされていて、延命効果を上げていらっしゃる先生方が多数おられます。しかし、がん性腹膜炎や胸膜炎になると、もう治療法がないと判断され、余命宣告されたり、ホスピスカ緩和ケアを勧められたりする患者さんが多くおられます。

ます。

そのような患者さんに対して、本院では少量の抗がん剤を用いて体に負担の少ない腹腔内・胸腔内がん治療を行い、長期延命の効率の高い実績を上げています。副作用の少ない抗がん剤であっても、活性酸素が多量に出るのか、治療後に食欲不振・倦怠感が出ることがあります。しかし、超高濃度ビタミンC点滴を行えばいろいろな副作用が軽減できるといふ事実を、超高濃度ビタミンC点滴を行っている先生方は実感されておられると思います。

本院のがん腹膜炎の治療にとつ

て、超高濃度ビタミンC点滴は重要な存在です。余命宣告を受けてホスピスを勧められた患者さんの中には、あきらめずに何か治療はないかと思っている方々も少なからずいらっしゃいます。そんな患者さんに対して、通院のみで行える超高濃度ビタミンC点滴を行いながらADL（日常生活動作）の低下を防ぎ、腹腔内がん治療の効果が得られて患者さんの状態は凄く良くなります（写真1）。

がん性腹膜炎とは

胃や腸などの臓器の外側と、お腹の壁の内側を覆っている薄い膜を腹

膜といいます。がん性腹膜炎は、こ

2020.7.24

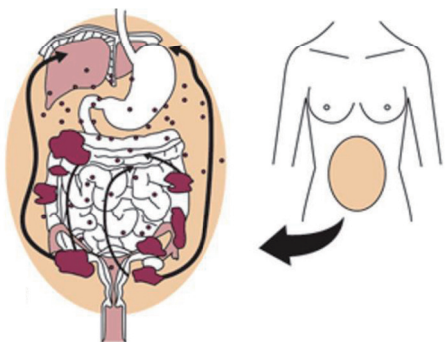


写真1

2020.8.24



がんが広がっていく様子



風船の内部のような腹腔内で、がん細胞がまきちらされるのが腹膜播種
腹腔内の色々な場所で、がんが大きな固まりとなったのが腹膜播種病巣

图 1

がん性腹膜炎の余命

無治療の場合、一年以上
生存の可能性ほとんどなし

さらに悪化

腸閉塞

無治療で余命2ヶ月
治療しなければ
6ヶ月以内

閉塞性黄疸

無治療で余命1ヶ月～2ヶ月
 一般の治療（ステント）で軽快しても
 がんを放置させる
 （余命6ヶ月以内）

图 2

2 がん性腹膜炎の外科治療

腹水中のがん細胞を制圧し、腹膜播種病巣を封じ込めることができれば、腹膜播種を剥がし取るがん性腹膜炎手術も適応となります。ただし、死亡率が高い大手術であ

がん性腹膜炎の治療

1 抗がん剤治療

なお、標準的な抗がん剤治療では、がん性腹膜炎には効果はほとんど認められていません。

ではどのようにして抑制するのかというと、腹腔内に少量の抗がん剤（遺伝子治療薬）を直接注入します。直接投与されることにより、一般的な血管内の抗がん剤投与よりはるかに効果があり、また逆に副作用も少なくて済みます。（図3）

ります（写真1）。そして、腸閉塞や黄疽の発症を防ぎます。これにより突然に亡くなる心配がなくなりま

がん性腹膜炎患者の余命

の腹膜にがんが転移したものです。腹腔に多数のがん細胞が転移した状態ですので、あたかもがん細胞の種が播かれたようにお腹の中に散らばることから、「腹膜播種」とも呼ばれます。

がんの刺激（炎症）により、腹腔内に浸出液が発生し多量になると腹水（がん性腹水）となります。腹水中にがん細胞が浮かび、腹水に乗って胃腸の全周囲、肝臓、胆嚢、胆管、内臓脂肪（大網）の表面にがん細胞が播き散らされることになります。

腸管や胆管の周囲や内臓脂肪の表面（大網）に付着したがん細胞は、そこで細胞分裂しながら大きな固まりとなります。これを腹膜播種病巣と呼びます（図1）。

(1) 胃腸周囲や内臓脂肪に形成された腹膜播種病巣は、お互いに癒着するようになり、胃腸の動きが制限される。厳密には腸は閉塞していませんが腸管内容物がスムーズに流れなくなります。(癒着性腸閉塞)

(2) 肝臓に転移し、肝内胆管や肝外胆管周囲に発育した腹膜播種病巣は胆管を圧迫し、胆汁の流れを妨げ黄疸を発症します。(閉塞性黄疸)

(3) 後腹膜まで転移すると尿管閉塞により水腎症になり、腎機能低下により全身化学療法が続けらなくなります。

このような病状から、癒着性腸閉塞や閉塞性黄疸を発症してしまい、

腹腔内抗がん剤治療の目的と方法

無治療の場合は残念ながら余命はおよそ2カ月以内です。がん性腹膜炎と診断されたら患者さんにとって、いつ突然にそれらを発症してもまったくおかしくない危険な状態なのです。つまり、がん性腹膜炎とは肺転移や肝転移や骨転移などよりも、はるかに致死的ながんの合併症です。余命6カ月前後の末期がんになりますので、標準診療しか行わない主治医でしたら緩和ケアを勧められることとなります。(図2)

がん性腹膜炎を抑制することにより、がん性腹水の増加を抑えます。すると、急速に、体の調子が良くな